5月12日　民報　1面

福島民報　明治25年8月3日第3種郵便物認可

在宅医療に大きな役割

福島医大会津医療センター

10年の成果と展望 —上—

奥会津で100人超利用

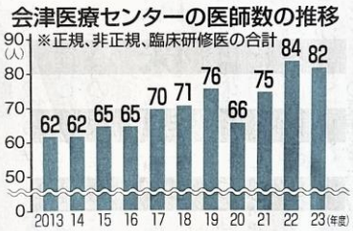
福島医大会津医療センター（会津若松市）は11日、開所から10年を迎えた。統合前の旧県立会津総合病院（会津若松市）、旧県立喜多方病院（喜多方市）と比べて医師数は約4倍に増え、会津地方の医療環境の充実に貢献してきた。近年、過疎化や高齢化が急速に進んでいる奥会津地域の在宅医療の中枢を担う医療機関としての役割が増している。10年間の成果を振り返り、次代につなぐ方策を展望する。

「調子はどうですか」。ベッドに横になる患者に医師が優しく声をかける。体の衰えや病気の進行によって通院が難しくなった患者の自宅で医師が診察する。

訪問診療で利用者宅を訪れた鎌田医師（右）ら

会津医療センターは、三島町に2020（令和2）年度設置された「奥会津在宅医療センター」の活動に参画している。町内の県立宮下病院と連携し、医師ら12人体制で柳津、三島、金山、昭和の4町村で訪問診療や訪問看護を担う。利用者は年々増加し、現在は100人を超える。2021年度と2022年度を比較すると、医師の診療実績数は1053件から1413件、看護師の看護実績数は1519件から2113件といずれも大幅に増えた。在宅医療センター長を務める山中克郎教授(64)は「会津医療センターの医師が増えたからこそ実現した」と強調する。

会津医療センターの医師数の推移



会津医療センターの医師数の推移は【グラフ】の通り。会津総合、喜多方両病院で計20人程度だった医師は昨年度、80人を超えた。福島医大（福島市）からの医師派遣も受けながら26の診療科を機能させつつ、奥会津などに医師が出向く体制を整えてきた。

在宅医療センターは山中教授が設置を提案した。きっかけは5年前、名古屋市の自宅で訪問診療と訪問看護を受け、天国に旅立った父の存在だった。「最後まで自分らしく亡くなった。家族も幸せだった。これをぜひ地域医療でやりたいと思った」。訪問診療が医師らによる地域巡回より広いエリアに対応できるとの考えもあったという。

在宅医療によって患者が元気を取り戻すケースは少なくない。鎌田一宏医師(40)は「食事ができないほど衰弱していたのに、自宅に戻ったら少しずつ食べられるようになった患者が何人もいた。〝家の力〟はすごい」と話す。

24時間、緊急対応に備える体制も住民を支える。昨年5月から在宅医療センターを利用する柳津町の内藤チイ子さん(99)は以前、夜間に気分が悪くなると、家族が会津若松市の病院まで車で送り、帰宅まで数時間かかることもあった。長女恵子さん(72)は「看護師さんが24時間電話対応してくれて薬の使い方などを教えてくれる」と安心感を口にする。

奥会津での事業は過疎地医療のモデルケースで、中通りなどの中山間地での導入を目指す構想もある。鎌田医師は他地域への波及には県と福島医大のさらなる支援が必要と訴える。

（2面に関連記事）

福島医大会津医療センター　経営が悪化していた旧県立会津総合病院、旧県立喜多方病院を統合し、2013（平成25）年5月11日、会津若松市河東町に開所した。付属病院に計26の診療科を設け、病床数は226床。センター長は元日本医学会長の高久史麿氏が開所当初から務めていたが、昨年3月の死去に伴い、空席となっている。